

逆臣足利尊氏を考えます

目次

はじめに

- 1、足利家について
- 2、尊氏について
- 3、後醍醐天皇について
- 4、後醍醐天皇の倒幕
- 5、倒幕後の後醍醐と尊氏の思惑の違い
- 6、建武新政の崩壊
- 7、南北朝時代
- 8、尊氏政権での内紛（観応の擾乱）
- 9、天皇への反逆行為
- 10、尊氏の天皇への対応
- 11、尊氏の性格と武士への対応
- 12、尊氏の評価

おわりに

はじめに

あの室町幕府を創設した征夷大將軍足利尊氏^{たかうじ}についてです。後醍醐天皇を吉野に追いやった逆臣・逆賊として歴史史上もつとも悪人の一人として明治以降位置づけられて来ました。

しかし戦後は、学会において再評価がこころみられ、文学でも吉川英治の「私本太平記」が出版され、更にNHKの大河ドラマ「太平記」が放映され足利尊氏寄りの評価が出てきました。

それでは足利家の家格、後醍醐天皇の思想を見ながら尊氏の生きざまから何故彼が逆臣・逆賊と言われるようになったかを考えてみます。

1、足利家について

一口で尊氏を語りますと、鎌倉時代末に後醍醐天皇に協力して北条政権（鎌倉幕府）を倒しましたが、その後すぐに後醍醐天皇と仲たがいで、天皇を吉野（奈良の南）に追いやり、自分の政権（室町幕府）を立ち上げた人物です。

それでは何故尊氏はこのような行動に出たのかを追ってみましょう。

そもそも足利家についてです。

足利家は清和源氏の名門です。初代は足利義国です。清和源氏は頼義・義家親子が11世紀に起こった奥羽の内乱いわゆる前九年後三年の役を鎮めて源氏の名を一挙に高めました。

義国のお父さんは義家です。義国は都から下野（栃木県）足利に拠点を変えました。そこで足利氏を名乗り始めました。尊氏は義国を祖として9代目になります。歴とした源氏の主流です。

足利氏は足利荘の領主の規模に過ぎませんでした。かの源頼朝が平清盛打倒で伊豆で立ち上がった時に、尊氏の祖先、三代目義兼が頼朝の下に勇躍馳せ参じ手柄を立て、源家の一族として頼朝の覚えめでたい存在になりました。

頼朝の祖先も足利氏と同じく義家で、義家から五代目が頼朝です。頼朝の源家が嫡流家、源家の本家です。足利家は頼朝源氏から見れば庶流ですが、名門源氏で格の高い一族です。

頼朝の源氏は頼朝、その子頼家、実朝が亡くなり、この源氏の本家筋が途絶えてしまいました。

ここでもし他の源氏一族を将軍家を継がせるとなれば、この足利家が筆頭の候補であったことは間違いないでしょう。

しかし、鎌倉幕府の最高の実力者の北条氏は足利源氏を起用しませんでした。九条家（藤原）、後に天皇家から将軍を迎え、傀儡の将軍とし、北条氏が執権として幕府を支配しました。

一方足利氏は北条氏の権力の大きさを感じていました。北条氏につぶされないように、北条氏と婚姻関係を持ち、北条氏の傘下で大人しく充分注意して従っていました。

もし少しでも不穏な動き（政権を狙う）をしたら、頼朝の重臣たち比企能員、和田義盛や三浦泰村等と同じように北条氏に粛清されていたに違いありません。

2、尊氏について

尊氏です。

1305年に生まれで足利家嫡男（兄は早逝）、1358年に死没、享年54歳。母は上杉家（足利家家臣）の出、妻は赤橋守時（北条氏で鎌倉幕府15代最後の執権）の妹澄子です。

当初は高氏^{たかうじ}でしたが後醍醐天皇からその名^{たかはる たか}尊治の尊の一字をもらい、尊氏^{たかうじ}に改めました。

澄子との間には、嫡男義詮^{よしあきら}と次男基氏^{もとうじ}が生まれています。(尊氏には妾の子で別に直冬三男^{ただふゆ}が生まれます)

北条家との深い関係は続いています。

しかし足利家には頼朝源氏の後、本来は足利家が将軍になるべき家だとの自負が歴代の当主にあったようです。先祖の遺言(置文)にその旨の記述があったと言われています。尊氏にも本来は足利家が将軍との意識はありました。

3、後醍醐天皇について

ここで幕府打倒をやりとげた後醍醐天皇の話をしてします。

鎌倉時代、天皇家は後嵯峨法皇が亡くなった13世紀の終わりに大覚寺統と持明院統による両統迭立時代にはいります。いわゆる両統を代わる代わるに天皇に立てることになったのです。

これは両統が皇位継承で天皇家(朝廷)でもめたため、鎌倉幕府の執権北条氏が仲裁したのがこの方法だったのです。

持明院統の花園天皇が譲位(退位)の時が来ました。後宇多法皇は大覚寺統としては長男の後二条天皇(既に没)の子の邦良親王を考えていたのです

が、まだ9歳と幼いため、この親王を次に回して、臨時的に次男の尊治親王^{たかはる}を天皇に決めました。この人が後醍醐天皇(以後後醍醐と記します)です。

即位された時(1318年)の年齢は31歳です。即位されて分かりました。この人は大変な政治家だったのです。

後宇多法皇の院政を止めて、天皇親裁としました。未だ後宇多の存命中は抑えがきいたのですが、亡くなると鎌倉幕府(北条政権)を倒す計画をたてます。

倒幕計画は最初は計画段階で露見、後醍醐は追及を逃れました。二度目の倒幕は戦いとなり敗戦、そして三度目は戦いに勝利し、倒幕に成功しました。

この後醍醐天皇の倒幕の執念は何であるかです。

一つは、彼の思想です。

天皇は日本国統治に当たって親裁、即ち専制、独裁であらねばならない。

武士による支配（幕府）は認められない。武士は天皇に侍らう僕^{さぶ}である。現在の鎌倉幕府の存在は認められない。

天皇は権威の頂点ですが、専制の考えはそれまで日本ではありませんでした。この考えがどこから来たかですが、中国の帝王思想、即ち帝王の絶対専制君主制であろうと言われていました。

もう一つは、彼は後醍醐天皇ですが、臨時的な天皇で次の後醍醐天皇はなき兄（後二条天皇）の筋に戻さなければならないことが決まっています。

自分の子、自分の筋は自分の後に天皇にはなれません。

自分の筋を残すには両統迭立制度をなくす。即ち鎌倉幕府を倒すしかありません。

4、後醍醐天皇の倒幕

後醍醐天皇は自分の考えを実行にうつします。

一度目は計画の途中で露見しました。関係者は処罰されましたが、後醍醐まで追求の手が伸びず、無罪となりました（正中の変 1324年）。

その後再び倒幕を計画し実行にうつします。かの有名な楠正成^{まさしげ}が味方となりましたが、失敗し後醍醐天皇は隠岐の島に配流となります。（元弘の乱 1331年）

後醍醐天皇は廃され、持明院統と光厳天皇が即位します。

この時の幕府軍の総大将が足利尊氏です。足利家は三河国と上総国の守護として北条一族以外では幕府内で最大の有力武将であったばかりか北条氏からも頼りにされていたのです。

その後1年余りで倒幕ののろしが又あがります。後醍醐天皇の息子の護良親王^{もりよし}と楠正成です。後醍醐天皇も隠岐の島から脱出して京に向かいます。

幕府（北条氏）は又もや足利尊氏を総大将に仕立てて京に討伐に向かわせます。尊氏は自分ばかりこき使うのか不満がありました。

そこに後醍醐天皇から味方になるようにとの綸旨（天皇の手紙）が来ます。

上述しましたように足利家累代本来は自家が鎌倉幕府の将軍だとの意識が奥底にあります。尊氏は決意します。

自家は源氏の一番の家格である。北条氏を倒して征夷大將軍となり武士の棟梁となって鎌倉幕府の長になるのは自分である。

尊氏は後醍醐天皇に協力することに決意します。遠縁の新田氏に呼びかけ、表向き後醍醐天皇派を討つ総大将として、京に赴き、反旗を翻し六波羅探題

(幕府の京の軍事機構)を討滅させます。

同時に鎌倉から脱出した長男(義詮4歳)を大将に、新田義貞に鎌倉の北条氏を討たせます。(北条氏滅ぶ 1333年)

5、倒幕後の後醍醐と尊氏の思惑の違い

後醍醐天皇は復歸し、政權を握りました。持明院統の光厳天皇を廃します。先ず仕事は働いてくれた武士への恩賞です。

一番は尊氏です。支配地については鎌倉以来の三河国と上総国に加え、恩賞として武蔵国、遠江国、駿河国、伊豆国、越前国の5か国が加えられました。

他の主要な功労者の楠正成が河内国、和泉国の2か国、新田義貞が上野国、越後国の2か国、その他の功労者1か国以下に比べて尊氏の功労への評価の大きさが分かります。

尊氏の大軍団と源氏としての名声があったから京と鎌倉の北条氏は敗退し、後醍醐天皇勝てたのです。

しかし後醍醐天皇は独裁政權を目指します。建武の新政と言っています。公卿(上級の公家)や武士に政治を一切委ねません。すべての事を自分で直接決めるとします。家臣たちに会議は開かせません。そこでは決めないのですから。

「朕が新儀は未来の先例なり」(自分が決めたことはこれからの法律である)とのたまはれました。

こんな統治者は日本において過去も、それ以降の政權保持者に現れません。

独裁者織田信長も、豊臣秀吉でも会議を開いて家臣に意見を言わせて重要事項を決めます。もちろん家臣の意見を聞かないことはあります。会議を開かせない独裁の政治はありません。

一方尊氏は北条氏が滅亡後に武家の棟梁として鎌倉幕府の後を継ぐつもりでした。当然その権利はある。圧倒的武力は自分の下に集まって来て、北条打倒が出来たのであるからです。

河内の土豪の楠木正成や護良親王は最初に立ち上がった功労者ですが、小兵力です。尊氏が立ち上がらないと後醍醐派の勝ちがなかったことは明白です。

しかし後醍醐天皇は尊氏の要求を認めません。上述のように自分の専制の下で武士の政權である幕府の存続はあり得ません。

両者はすぐに仲たがいます。

6、建武の新政の崩壊

北条氏の残党（13代執権高時の息子の時行）が巻き返し図り、一時鎌倉を占領されます。（中先代の乱1335年）

これに尊氏が出陣して撃退し、鎌倉を取り戻します。

この後、後醍醐天皇は尊氏に京への帰還命令を出しますが尊氏は従いません。幕府を構築しようとしています。

後醍醐天皇は新田義貞を大将にして鎌倉に向かって尊氏討伐を命じますが、尊氏は東征の義貞に勝利（1335年）して、逆に京まで攻めあがります。

京では後醍醐派の奥羽の北畠顕家も駆けつけ、尊氏は敗戦します。尊氏は京を撤退し、九州まで下り軍団を立て直し改めて京に攻め上ります。兵庫湊川で後醍醐派の楠正成は敗死します。

戦前に正成は後醍醐天皇に尊氏との和解を進言していたのですが聞き届けられませんでした。

この時に尊氏は朝敵とされましたので、持明院統から光明天皇をたてて綸旨をもらい後醍醐派に対抗しました。

持明院統の光明天皇を立てたことから両者は決定的な別れとなります。天皇が二人になったのです。

7、南北朝時代

戦いは尊氏が勝ち、後醍醐天皇は比叡山に逃げ、そこで尊氏といったん和解しましたが、すぐに和解は破談し、後醍醐は吉野（奈良飛鳥の南）を拠点として両者は政権争奪の戦いを繰り広げます。（1336年）

これからを南北朝時代と言っています。吉野の後醍醐天皇が南朝、尊氏が立てた持明院統の天皇が北朝と言います。

この後、後醍醐天皇派の新田義貞、奥羽の北畠顕家も尊氏派に破れ、南朝（後醍醐天皇派）は衰退して行く中、後醍醐天皇は1339年吉野で亡くなります。

1333年に天皇に返り咲き政権を樹立しましたが、1336年には尊氏が政権を樹立しました。後醍醐の政権掌握（建武の新政）は3年間でした。

尊氏の政権が足利幕府（室町幕府）です。以後15代義昭将軍まで続きます。

（15代将軍義昭が織田信長に京を追われ幕府が滅亡するのが1573年）

尊氏は自分を征夷大将軍に認めてもらえれば後醍醐に服する旨申し出ましたが、後醍醐は天皇親裁（専制）の主張は変えませんでしたので和議はなりませんでした。

南北朝時代はその後尊氏と弟の^{ただよし}直義のとの間で内紛があり、その絡みで後醍醐亡き後も尊氏亡き後も南朝は続きます。

8、尊氏政権での内紛（^{じょうらん}観応の擾乱）

後醍醐が吉野に行き、尊氏は建武式目を制定（室町幕府成立 1336年）、続いて征夷大將軍に就任します。そして南朝の軍事勢力が衰退していく中で後醍醐は1339年に亡くなります。

これで室町幕府（北朝）は順調に進むかと思われましたがそうはなりません。

尊氏が打ち出した統治人事、方法から内乱になっていきます。

統治全般については弟の^{ただよし}直義まかせ、自分の職分は家臣への恩賞（領地）関係に限定するとしました。

一歳違いの兄弟二人（母親も同じ上杉氏）は後醍醐に味方して、北条氏打倒で立ち上がった時から仲が良かったと言われていました。

しかし、統治は直義にまかせると言っても政権は將軍の尊氏です。日常の政務で行き違いが出てきます。

それは現実には、尊氏の執事（足利家家政の筆頭）である^{こうのもろなお}高師直と弟の^{ただよし}直義間で起こります。

この執事の役は、後の幕府管領や戦国時代以降の家老と少し違い、主人個人への奉仕役で秘書室長のようなものですが、家臣筆頭^{こう}の高家の職位です。

尊氏を付度して、その威を笠に着て直義と当たりますので、両者に軋轢が生じます。

両者の最初の喧嘩では、尊氏の仲裁は直義寄りが高師直の執事罷免でした。（1349年）

次の両者の喧嘩での尊氏の仲裁は、師直寄り直義を政務から引退させ、尊氏の嫡男^{よしあきら}義詮に政務（直義が後見）を担当させます。そして義直側近の上杉全能（足利家重臣）を流罪の処分としました。ところが師直派は上杉全能が流罪に向かう途中で殺害してしまいました。

怒った直義は高師直・師泰兄弟打倒で兵を上げます。（1350年）この時尊氏は高兄弟に味方します。直義は南朝に降伏を言います。

戦いは直義派が優勢の中で和睦（休戦）が成立します。和睦が話しあわれるため、尊氏と高兄弟（師直・師泰）が京に向かう途中で、高兄弟が直義派によって殺害されます。上杉全能が殺されたことへの復讐です

京での和睦に内容は尊氏と直義の間となります。

- 尊氏に従った武士への恩賞を認める・・・直義了承
- 高兄弟を殺害した者の処刑・・・流罪で決定
- 政務は義詮（尊氏の嫡男）で直義が補佐・・・了承
- 恩賞宛行権は尊氏が持つ・・・了承

負けた高兄弟に味方した尊氏のほぼ要求通りとなっています。これは直義に味方した武士は、尊氏に敵対したのではなく、高兄弟への反発からで、戦いが終結すれば尊氏の下に戻る者が多かったと考えられます。

尊氏・長男の義詮（政務担当）ラインと直義の政務補佐の関係は、義詮と直義の関係悪化でうまくいきません。

このような情勢の中で、尊氏は赤松則佑（播磨国）攻め、義詮は佐々木道誉（近江国）攻めのため京から出陣します。

京に残った直義は、これは尊氏・義詮親子が一緒になって京の自分を攻めて来ると思い、京から北陸に脱出します。

京に戻って尊氏は直義に帰って来るように求めましたが、直義は応ぜず鎌倉に向かい、基氏（尊氏二男）に迎えられます。基氏は叔父直義に好意的です。

直義は下向して来た尊氏と伊豆国府で戦いますが、直義には戦闘意識がうすく降伏して、尊氏と一緒に鎌倉に入ります。

そこで直義はまもなく亡くなります（1352年 46歳）。毒殺説があります。

尊氏は鎌倉への出陣に当たって南朝（後醍醐亡き後の後村上天皇）に降伏の形をとって講和します。しかし出陣後、京の義昭は南朝側によって一時京を追われ、北朝の光厳上皇、光明上皇、崇光天皇、皇太子通仁親王を南朝側に連れ去られます。

尊氏は京に戻って来て北朝に後光厳天皇（光厳天皇の子）を立てます。

一方尊氏の三男で直義に養子に出していた^{ただふゆ}直冬は常に直義方に付き、直義亡き後も中国地方、九州で反尊氏の行動を続けます。

それでも南朝の勢力が衰退していく中で尊氏は京都に長男義詮、鎌倉府に次男基氏を配し、政権の基盤を固めていきます。

その中尊氏は1358年、54歳で亡くなり、政権を長男義詮に託します。

弟直義との間は人もうらやむ中の良さだったのですが、最後は兄弟喧嘩してしまいました。直義は理論家で、教養人で正義感が強く、どちらかと言えば融通がきかない人でしたが、その性格から足利家の譜代の一定の家臣（上杉家等）から慕われていました。

一方尊氏は足利家嫡男として総大将として育ち、ほとんどの譜代の家臣、多くの一般武士に人気がありました。それは戦いに強い（総大将でありながら前線で指揮を取る）大将であり、味方の武士へ心配りが厚いことです（戦功への感謝状を直筆で書く時はその武士の教養に合わせほとんどの字を平仮名で書く）。

更に、恩賞でもらった領地や敵から奪った領地はほとんど味方の武士に配ってしまい、自分は一国分の領地も持たない。

更に政治家の一面が強く、降参した敵は平気で許して味方にするし、南朝とも負けていなくとも一時的に降参の形をとります。後醍醐を直に攻撃しません。吉野は攻めませんでした。

結果的に後醍醐よりも、直義よりも武士たちを引き付ける力が大きかったと言えます。

9、天皇への反逆行為

足利三代義満の時に南北朝は合体します（1392年）。北朝一本になりました。この後応仁の乱あたりまで南朝の後胤が活動もいくらかありますが、それ以降南朝は正史から消えます。

足利尊氏は明治以降天皇に背いて政権を奪取した人物として逆臣・逆賊の扱いを受けてきました。

ここで日本史上天皇に逆らった人々を振り返ってみましょう。

古い順からです。

一に飛鳥時代に崇峻天皇を殺害した蘇我馬子、二に平安中期の藤原氏（道長、頼通等）の摂関政治で天皇をないがしろにする、三に後白河法皇の政権を奪い、軟禁状態にした平清盛、四に後白河法皇に逆らって鎌倉幕府を樹立した源頼朝、五に倒幕の挙兵に対し北条氏が後鳥羽上皇、順徳上皇等を配流の処分、六に後醍醐天皇に対する尊氏の裏切りです。その後戦国時代に入り、織田信長も豊臣秀吉も徳川家康も天皇を利用することがあっても、天皇に政権を戻すと考えた人はいません。

考えてみますとどの政権も天皇に反抗的です。蘇我馬子は天皇を殺害です。北条氏は天皇及び天皇経験者の数人を配流です。

10、尊氏の天皇への対応

尊氏の天皇への対応はどうでしょう彼のその考え方をみます。

天皇には弓を引かない。敵は後醍醐天皇ではない。その周りの新田義貞等である。天下のためなら違勅（天皇の命令に服さない）もやむを得ない。（儒教の考え方）

後醍醐が吉野に行き勢力が衰退していても吉野は攻めません。天皇を攻撃したら厳罰に処すと部下に厳命しました。

尊氏は後醍醐がどこで暮らしても構わないと周囲にもらしました、捕えて配流にしたくなかったのです。

後醍醐が亡くなった後に天龍寺を建立してその供養をしました。天皇として尊崇はしていましたが、武士の棟梁としての足利尊氏を認めてもらえなかったことへの反発でした。

尊氏は持明院統の光明天皇を立てますが、元々大覚寺統（後醍醐天皇）と持明院統から代わる代わる天皇を立てることになっていたのです。これは鎌倉時代に次期天皇擁立に当たって天皇家（朝廷）がもめて、これを執権北条氏が仲裁して決められたのです。後醍醐天皇の後は持明院統になります。尊氏は強引に他の皇統を引っ張り出してきたではありません。

持明院統の天皇の擁立は充分根拠がありました。

更に尊氏は光明天皇の後には大覚寺統の後醍醐天皇の皇子成良親王を次期天皇（皇太子）に決め、後醍醐も同意していたのですが、和議を破棄して吉野に行ってしまうされました。

後醍醐の後の大覚寺統の天皇は、後醍醐の父の後宇多天皇は後醍醐の兄後二条天皇の子邦良親王に決めていました。邦良が亡くなっていましたので邦良の子康仁が天皇と言うことも充分考えられたのです。

ここはもちろん尊氏は後醍醐の子を皇太子にしましたが、和議は破談となり、この話はなくなり、南北（吉野と京）に天皇がいますことになります。

尊氏は北条政権（鎌倉幕府）倒した後醍醐の偉大さを認めており、尊崇もしていました。

尊氏の武力で北条氏を打倒したと言え、何と言っても後醍醐は北条氏を倒すために少ない味方（兵力）中で三度も立ち上がったのですから。

後醍醐は自分の思想を持ち、天皇親裁（独裁）の方向を変えませんでした。こんな為政者は日本には以前も以後もいません。

地方領主である武士とそれを仕切る棟梁の制度を認めないのが根本思想です。

後醍醐が始めた建武の新政では先ずは、国司制度（律令制）と守護制（鎌倉幕府の守護制）を併用としましたが、各地でもめ、京で訴訟となりましたが、うまく対応出来ませんでした。

後醍醐でなく尊氏を選んだ武士（領主）たちは結局足利家（尊氏）に武士の棟梁として鎌倉幕府と同じように采配してほしいと考えたのです。

11. 尊氏の性格と武士への対応

それでは尊氏の性格について高名な禅僧夢想礎石の言を要約してみます。

（当時の南禅寺の住持で尊氏も後醍醐も尊崇していました）

①合戦において恐れず勇敢、②慈悲深く、敵に対しても許す心、③物惜しみをしない。

①は武将として当然でしょう。②も敵も相手によっては許さないと味方が集まりません。③は特筆すべきこと事があります。彼は元々の領地の三河国、上総国それに合わせ後醍醐天皇からの恩賞（5か国）の領地をすべて一族や、家臣に分配してしまいます。

こんな大将は以前にも以後にもいません。平清盛、源頼朝（関東の大半の領地）、北条（守護国の半数は北条一族）、豊臣秀吉（日本一の大金持ち）、徳川家康（関東中心に俗に800万石）も天皇、寺社、武士（大名）の中でずば抜けた大きな直轄領を以って政権・勢力を保持しました。

尊氏は足利家が源氏の棟梁として、武士の家格において絶対的優位を武士たちが認めることで国の支配は可能と判断したと考えられます。

しかし尊氏のこの家臣への大盤振る舞いが良かった、悪かったかはあります。一国の直轄領もなく、少ない領地で自家を賄わなければならないため、直臣の兵力が小さく、以後の歴代将軍は反乱者の対応に苦勞します。しかし足利政権（室町幕府）は250年も続いたのですから尊氏の方針が間違っていたとは言えないでしょう。

とにもかくにも尊氏は、源氏としての家格の絶対的な高さ、そして政治家としての組織する能力も高く、上記①～③の性格に合わせ、かつがれやすい性格もあって武士（地方の大小の領主）から人気がありました。

尊氏は京で後醍醐天皇派にいったん敗れ、九州に下りますが、その時関東から従って来た武将たちは皆九州に従って行ったのです。ですから九州を直ぐに制圧して九州の勢力を引き連れて京へ向かって東上できたのです。

要するに結果的に武将の間で、後醍醐天皇より尊氏の方が人気が高く、そ

の分兵力が尊氏に集まったのです。

12. 尊氏への評価

このようにお話しすると日本史上何故尊氏ばかりが逆臣・逆賊・悪漢として語られるようになったのかです。

尊氏が忠義の臣とは言えないでしょうが、もっと天皇（家）にひどいことをした為政者は上述のように何人もいます。

これは尊氏は逆臣、南北朝正せいじゅんろん閏論で南朝の正統を明治政府が言い出しましたことにあります。

明治維新政府は、日本国を天皇を核として国内を一つにまとめて統一国家とし、海外に打ち出す方針を確立しようと考えていました。

徳川将軍家なきあとの日本国の体制はプロシヤにまねて皇帝（天皇）を核としたのです。

その政策のなかで、一般国民になじみが薄い天皇を知らしめ注目させなければなりません。そのため国民へ数々の教育政策を打ち出しますが、ここで日本史上天皇への最大の忠臣を作り出しこれを手本とすることを国民に指導しました。

楠正成まさしげが選ばれました。後醍醐天皇の下に一に馳せ参じ、戦死した勇者です。反対する者はいないでしょう。

ところが正成は南朝の後醍醐天皇の忠臣です。後醍醐天皇（南朝）を正統な天皇とする必要が出てきました。

南朝は足利三代目の義満の時から皇統でなくなり、次いで正史からなくなります。しかし南朝を正統な皇統しないとストーリーが出来あがりません。

明治天皇（北朝）に南朝が正統な皇統でよろしいかとお伺いをたて、了承を得たのです。

不思議なことです。南朝が正統ならば、北朝の明治天皇は正統な皇統で無くなります。正統な皇統でないお方が現天皇（明治）となります。当時この矛盾を指摘した人はいるのですが、無視されました。

後醍醐に逆らい、寵臣の楠正成の敵、尊氏はにつくき逆臣、逆賊に仕立て上げられました。

尊氏亡き後に執筆された有名な物語があります。創作の多い歴史的な文学書と言われている「太平記」は後醍醐寄りの見方ですが尊氏についても客観的に記しています。「太平記」より史実の多い「梅松論」や「難太平記」は尊氏

寄りの見方です。

全く逆賊扱いをしていますのが、江戸時代に書かれた「大日本史」（水戸徳川家）です。

戦後は政府からの規制がはずれ、事実を記述された解説書、吉川英治の「私本太平記」、NHKの大河ドラマ「太平記」等によって尊氏の実態が明らかにされてきました。

日本史史上後醍醐天皇も足利尊氏も重要です。この二人があつて室町時代は到来しました。どちらも特筆すべき偉大な歴史上の人物です。

室町時代は日本政治史、経済史、文化史の基盤です。

おわりに

尊氏はどの時代の政権とも同じように天皇個人ではなく天皇家の権威を利用した仁です。武士の棟梁になって武士の政権を獲得、維持するためにです。

天皇への尊崇の気持ちはあつても天皇に政権を戻すとか、天皇のお考えを尊重するなどした政権は過去にほとんどありません（平安時代の院政時代は退位の天皇に政権がありました）。

明治維新政府も天皇絶対を形の上では作りますが、後醍醐天皇のような独裁を明治天皇に認める気は毛頭ありません。

偉大な明治天皇も天皇家が仏教の総元締め地位にありながら廃仏毀釈され、南朝が正当の皇統であることも飲まされました。

足利尊氏は平清盛、源頼朝、北条と同じように武士の棟梁、政権を主張し、それ以降の武士の政権も同じです。

尊氏だけが特に非難されることはないでしょう。

太平洋戦争後に戦前の反動で、学会で極端な南朝非難、北朝擁護の論も出ましたがこれも頂けません。

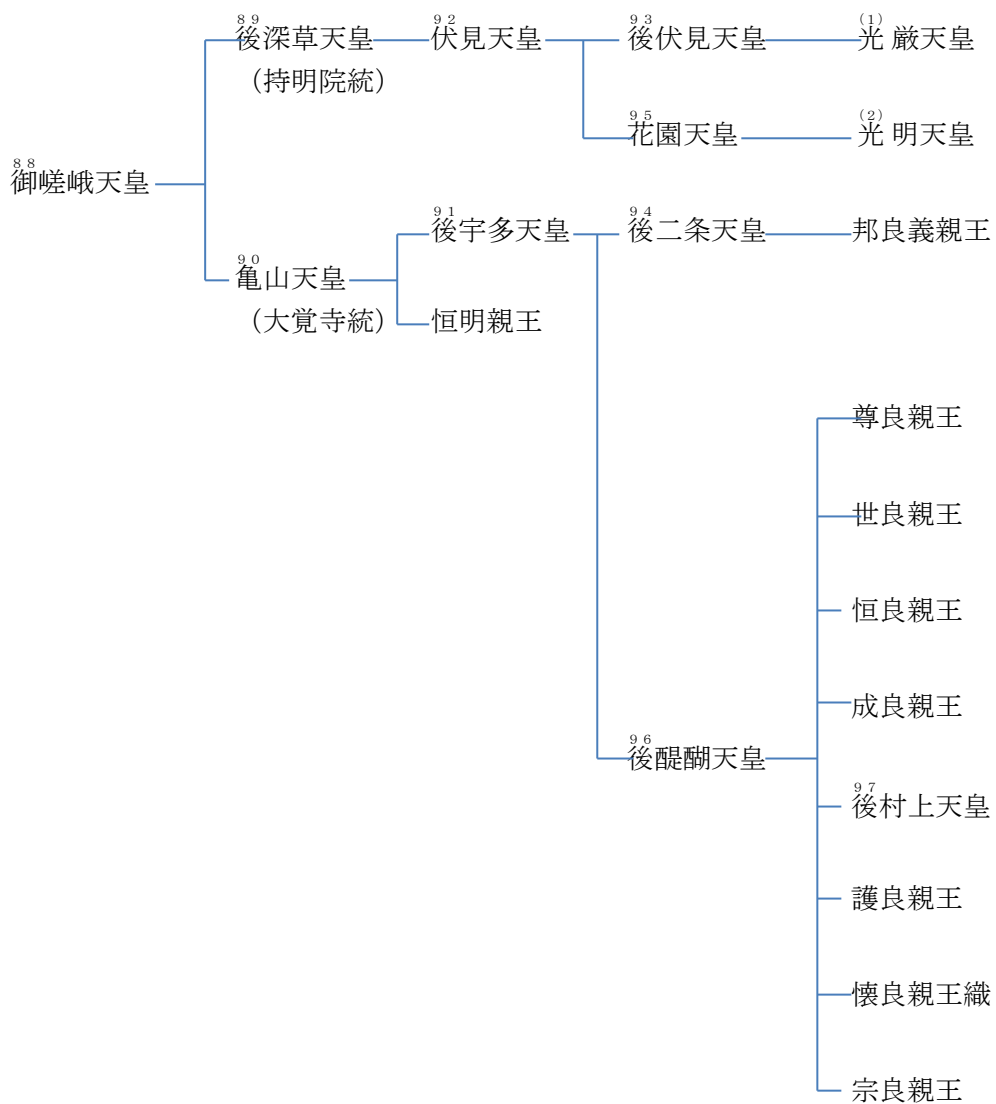
もちろん後醍醐天皇も歴史上欠かせない重要人物です。

以上

2018年1月11日

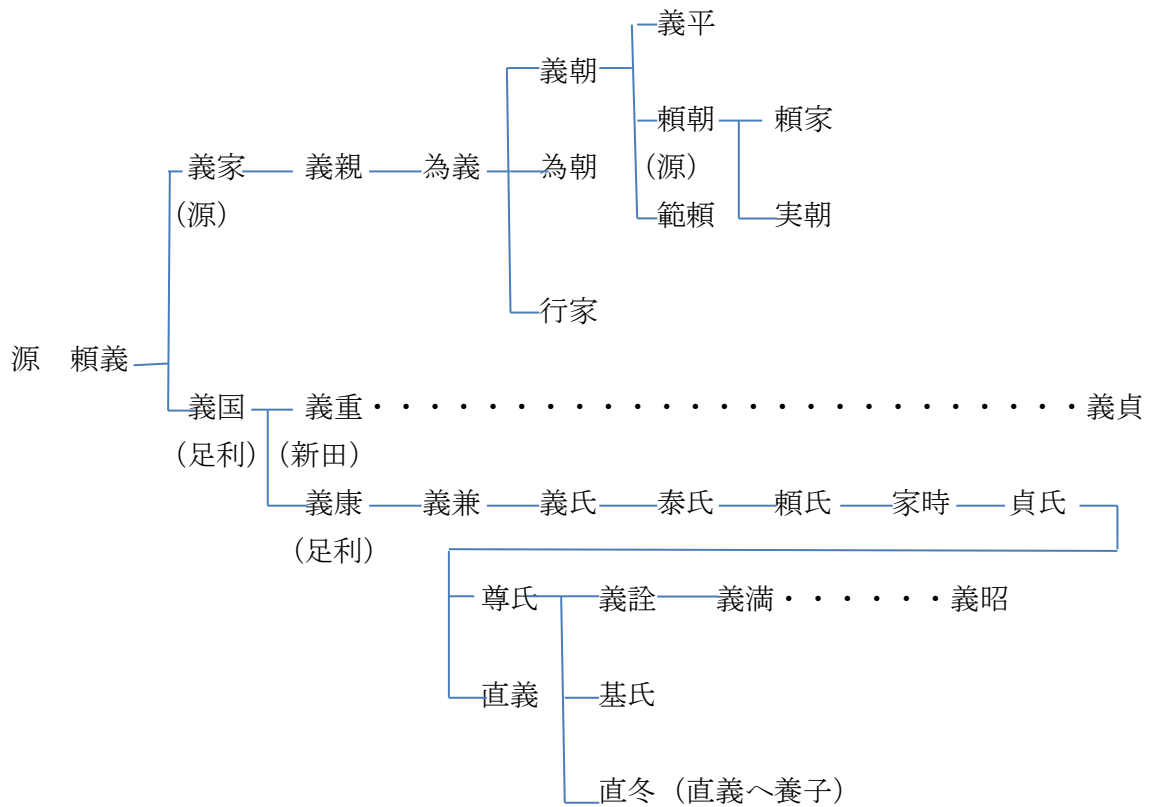
梅 一声

両統（大覚寺統と持明院統） 迭立時代の天皇系図



* (1) (2) は北朝

足利源氏と源氏本家



参考文献

- 1、南北朝の動乱（日本の歴史9） 佐藤進一 1965 中央公論社
- 2、南北朝の動乱（日本の時代氏10） 村井章介編 2003 吉川弘文館

- 3、足利尊氏 峰岸純夫・江田郁夫 2016 戎光祥出版
- 4、足利尊氏の再発見 峰岸純夫・江田郁夫 2011 吉川弘文館
- 5、梅松論・源威集 矢坂和夫・加美宏校注 1975 現代思潮社
- 6、中村直勝著作集 第七巻 中村直勝 1978 淡交社
- 7、神皇正統記 増鏡 岩佐正・時枝誠記・木藤才蔵校注 1965
岩波書店
- 8、難太平記 群書類従
- 9、歴史読本（足利尊氏 野望の戦い） 1991年6月 新人物往来社
- 10、太平記（全3巻）後藤丹治・釜田喜三郎校注 1960 岩波書店
- 11、私本太平記（全8巻） 吉川英治 1990 六興出版
- 12、観応の擾乱 亀田俊和 2017 中央公論社
- 13、国史辞典 吉川弘文館
- 14、日本史辞典 浅尾直弘・宇野俊一・田中琢 1997 角川書店
- 15、守護・戦国大名事典 西ヶ谷恭弘 1998
- 16、歴史と人物—南北朝内乱の主役たち 網野義彦・永原慶二対談
1985 中央公論